

●三重県津市立大里小学校

紙面に念願のメリハリが。 以前より格段に上がった伝達効果。

学校だよりや学年通信、保健だよりなどのプリント媒体で、校内外のコミュニケーション活動を積極的に行っている大里小学校。今回は健康教育に活用されている保健だよりを中心に2色プリントの効用についてレポートしました。

活発な内外への情報発信

1875年（明治8年）創立、すでに130年超の歴史を刻む大里小学校（米川武宏校長）。現在7学級（特別支援学級を含む）、197名の子どもたちが学んでいます。

2色デジタル印刷機の助成校となったのは平成18年8月。印刷機が設置されると、職員全員を対象に使い方の研修会が開かれました。

同校で発行されている定期刊行物は多彩です。『学校だより』がやく大里っ子』を始め、学年通信、学級通信、保健室から保護者・子ども向けの『ほけんだより』、教職員向けの『ほけんしつだより』、給食室から保護者・子ども向けの『しよく』など。発行頻度も高く、昨年度、学校だよりは月に3回〜6回、学級通信も月に1回〜5回、中には日刊というものもありました。これらすべての印刷物と各学年の教材などで2色印刷が行われました。6カ月後の平成19年1月には、保護者および子どもたちに対し

て、印刷物が2色化したことについてアンケートをとり、その印象や効果、改善点などを探っています。今回は、保健室からの情報発信を意欲的に続ける養護教諭中西唯公先生の活動を中心に、2色プリントの実践と効用を考えます。

いかに記事に メリハリをつけるか

保護者・子ども向けの『ほけんだより』は、週刊ないし隔週刊。中西先生が3年前に赴任して以来、継続して発行しています。

「大里小学校は私が赴任する前まで文部科学省の健康教育研究指定校で、健康に関する研究を3年間していました。そうした素地を生かす形で、学校ではどのような健康教育をしているのか、家庭で実践できることは何かを発信したいと思いました」

と中西先生。また同様に、保健に対する思いを伝え、子どもに分かりやすく伝えてもらうために、教職員向けの月刊『ほけんしつだより』を発行。保健室への来室者の状況から、その時節ごとに気をつ

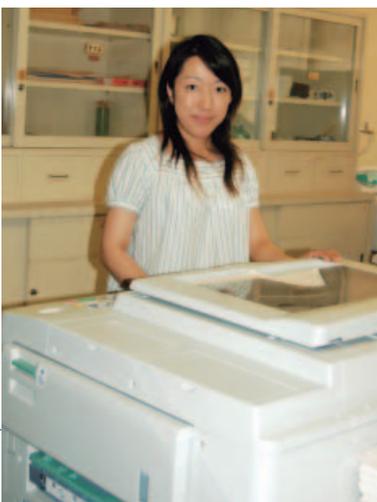
けてほしいことを発信しています。

「保護者も先生たちもとても忙しい中でこれらの通信を手にしませう。そこで大切なのは、いかに記事にメリハリをつけて、ポイントをぱつと分かつていただくかということ。2色デジタル印刷機が入るまでは、字を大きくしたり、記事の間隔を開けたり、いろいろ工夫をしました。しかしなかなか思い通りにはいきませんでした。2色になって、ようやくメリハリが出るようになりました」（中西先生）

色に役割を与えて効果的に

最初は試行錯誤の連続だったといます。

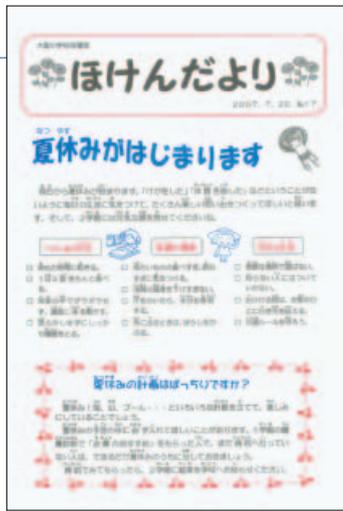
「使いこなすようになるまでは、他の先生方と一緒に、意見を出し



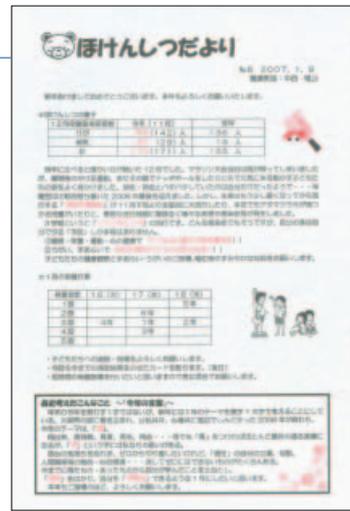
中西唯公(ゆうこ)先生



給食室から『しょく』



『ほけんだより』(保護者・子ども向け)



『ほけんしつだより』(教職員向け)



左から、1年 学年通信『てととて』
2年 学年通信『アミーゴ・アミーガ』
3年 学年通信『なかよし通信』



学校だより『かがやく大里っ子』

最近、赤の補助的な使い方をしてきた青の、落ち着いた色感に関心が向いているとのこと。
「青一色で印刷してみると、柔らかな印象の紙面になります。もつといういろと試してみたいですね。黒一色だけでつくることが当たり前だった通信ですが、色が一つ入るだけでつくる側も楽しいし、伝達効果は格段に上がると思

伝達する面白さを知る

合いました。赤を使えば目立つだろうと、紙面に赤をあふれさせたこともありましたが。却ってガラガラして分かりづらい、と言われてしまいました」
と中西先生は苦笑します。
「いま、赤と青、黒それぞれの役割を考えて、自分なりに効果的な使い方ができているかなと思います。赤は、いちばん先に見てほしいポイント。青は、2番目に読んでほしいところ。黒は落ち着いて読んでほしい説明部分、と区別しています。子どもたちはカットなどに色がついていると、注目度がぐっと上がるようですね」



大里小学校 (現在、改築中)

「2色にしたことによる違いを聞いたアンケートでは、保護者から、見やすくなった。
・ 注意深く読むようになった。
・ きちんと読むようになった。
・ 読むのが楽しくなった。
・ どこを読めばよいか分かるので、忙しい中で助かる。
などの声が寄せられています。
「2色の通信をつくることによつて、プリント媒体のもつ力、楽しさ、伝達する面白さを知る、よい機会になったと思います」
中西先生はそう締めくくりました。